

〔研究ノート〕

## 教育改革における子どもの主体性の希求（続報）

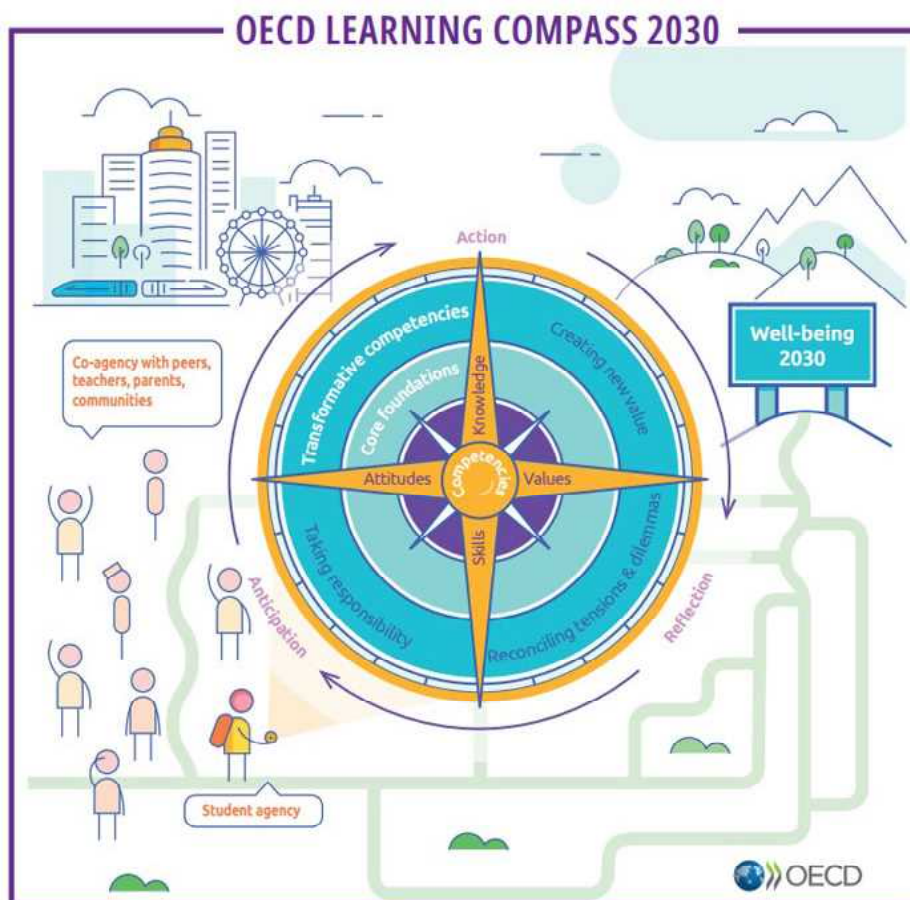
### － OECD の「生徒エージェンシー」と「共同エージェンシー」の概念に関する小考－

助 川 晃 洋

エージェンシー（agency）は、代理業、代理店という一般的な語義とは別に、教育研究の領域、すなわち教育学や心理学、あるいはそれらが交差する分野では、人間の属性、それも人間が行為する際の主体性、当該の行為を可能にする能力を指す概念や術語として位置づけられ、行為（の）主体性、行為能力などと訳されてきた。しかしエージェンシーという言葉が、従来、教育改革論議の中で、アカデミックな意味のままに理解され、使用されてきたとは言い難い。こうした状況に変化が生じたのは、実は近年のことであり、その大きなきっかけとなったのが、2015年にスタートした OECD Future of Education and Skills 2030 プロジェクト、いわゆる Education 2030 プロジェクトである。2018年までの4年間にわたるフェーズ1を終えて、2019年5月に公表された一連の最終報告書のうち、コンセプトノート「OECD ラーニング・コンパス（学びの羅針盤）2030」（OECD Learning Compass 2030、以下、「ラーニング・コンパス」と略記する）<sup>(1)</sup>では、同名のイメージ図が描かれており（下掲）、その直後に「生徒エージェンシー／共同エージェンシー」（Student Agency/Co-Agency）という見出しを冠した箇所が設けられている。本稿は、この範囲だけにフォーカスを当てて、そこでの議論を追跡することを意図したささやかな試みである。なお、より以前の関係動向については、中間報告に相当するポジション・ペーパー（2018年2月）の「学習者のエージェンシー」（learner agency）概念に着目した既発表の拙稿を参照願いたい<sup>(2)</sup>。

\* \* \* \* \*

「ラーニング・コンパス」では、評価やカリキュラムではなく、あくまでも学習の枠組みが、次のように整理されている（p.5）<sup>(3)</sup>。



ここで生徒（中高生はもちろん、幼児、児童、学生、大人など、すべての学習者を包括する）には、個人と集団・社会のウェルビーイング（well-being）の実現という 2030 年の目標を達成する（方位磁針を携えて山を登る）ために、エージェンシーを行使することが求められている。「ラーニング・コンパス」では、次のように述べられている（pp.5-6）。

ラーニング・コンパスという比喻は、生徒が教師の決まりきった指導や指示をそのまま受け入れるのではなく、未知なる環境の中を自力で歩みを進め、意味のある、また責任意識を伴う方法で、進むべき方向を見出す必要性を強調する目的で採用されました。このため、生徒エージェンシー（student agency）の概念はラーニング・コンパスと密接に関わっています。ラーニング・コンパスを手にしている生徒を描いた上記の絵は、生徒が目的意識を働かせ、自分自身の責任を果たしながら、周囲の人々、事象、状況をより良くするために学んでいく姿を表象するものです。

「生徒エージェンシーはラーニング・コンパスの中心的な概念です」（p.3）。生徒エージェンシーは、変革を起こすために、自分で目標を設定し（結果を予測し）、振り返り、責任をもって行動する能力であると定義することができる。そ

して生徒エージェンシーは、独力によってではなく、多様な人々との関係性の中で作られるものとみなされている。「ラーニング・コンパス」では、次のように述べられている（p.6）。

ただし、生徒エージェンシーは生徒による自治や生徒による選択を意味するものではありません。人は社会的な文脈の中でエージェンシーを学び、育み、そして発揮するのです。そのため、上記の絵は生徒が仲間や教師、家族、そしてコミュニティに囲まれ、それらの人たちがウェルビーイングに向けて生徒と相互作用して生徒を導いていく様子を描いています。これが共同エージェンシー（co-agency）の概念です。

共同エージェンシーは、まさに周囲とのかかわりにおいて成長していくことであり、生徒にとっては、他者の発想を活用したり、視点を共有したり、積極的に対話を繰り返したりすることが重要である。

ところで「ラーニング・コンパス」におけるエージェンシーへの直接的な言及は、以上わずか二つの段落のみで打ち切られている。内容的にも概要説明どまりで、具体性に乏しく、中途半端な印象は拭えない。第一局面でのエージェンシーに関する OECD の見解を詳細に把握しようとするならば、もう一つのコンセプトノート「2030年に向けた生徒エージェンシー」(Student Agency for 2030)<sup>(4)</sup>を取り上げる方が得策であろう。その作業は、次回、すなわち続々報で行う予定である。

\* \* \* \* \*

戦後の我が国では、主体的な個人を確立すること（ひいては主体性の欠如という日本社会の問題点を解決すること）が、教育改革＝政策を貫く、果たすべき理想の一つであり続けてきた。現在では、予測困難で、先行き不透明な未来を生き抜くためには、受け身の姿勢ではダメだとして、その対比で主体性の育成が叫ばれ、主体的な学びが推奨されている<sup>(5)</sup>。そして『社会に生きる個性』において溝上慎一は、主体的学習を次の三層から成るスペクトラムにしてとらえており、上に行けば行くほど学習それ自体とエージェンシーが深まっていくと考えている<sup>(6)</sup>。

### （Ⅲ）人生型の主体的学習

中長期的な人生の目標達成、アイデンティティ形成、ウェルビーイングを目指して課題に取り組む。

### （Ⅱ）自己調整型の主体的学習

学習目標や学習方略、メタ認知を用いるなどして、自身を方向づけたり、調整したりして課題に取り組む。

（I）課題依存型の主体的学習

興味・関心をもって課題に取り組む。書く・話す・発表する等の外化の活動を通して課題に積極的に取り組む。

このようにエージェンシーと言っても、レベルや段階がある。しかし「ラーニング・コンパス」のエージェンシー論は、第Ⅰ層と第Ⅱ層を飛ばして、いきなり第Ⅲ層から始まっているように受け取れる。理論形成上の重点が、たまたまそこにあるだけのことかもしれないが、それでも本当に二段抜かしでよいのかどうか。最終的に実践への適用を視野に入れるならば、やはり疑念が残る。

Education 2030 プロジェクトは、すでに第二局面に移行しており、現在も進行中である。

2019年から2022年までのフェーズ2では、フェーズ1で検討されたコンピテンシーの育成やカリキュラムが、現場において効果的に実施されるための手段として、カリキュラム改定と連動して改定される教授法・評価法や教員養成・教員研修などについて、引き続き、国際的な議論を重ねています（p.1.）。

部外者には内情を知る由もないが、新たに「教師エージェンシー」（teacher agency）をバリエーションに加えるなどした上で、各種エージェンシーについても主題的に扱われているに違いない。成果の公開を待ちたい。

注

- （1） [https://www.oecd.org/education/2030-project/teaching-and-learning/learning/learning-compass-2030/OECD\\_LEARNING\\_COMPASS\\_2030\\_Concept\\_note\\_Japanese.pdf](https://www.oecd.org/education/2030-project/teaching-and-learning/learning/learning-compass-2030/OECD_LEARNING_COMPASS_2030_Concept_note_Japanese.pdf)（2022年8月26日取得）
- （2） 助川晃洋「教育改革における子どもの主体性の希求－OECDの『学習者のエージェンシー』概念に関するメモランダム－」『国士館人文科学論集』第2号、国士館大学大学院人文科学研究科、2021年2月、pp.47-54.
- （3） 引用元のページ番号を括弧書きした。以下、同様である。なお図の全般的な解説は省略し、次の著書に委ねたい。  
白井俊『OECD Education 2030 プロジェクトが描く教育の未来 エージェンシー、資質・能力とカリキュラム』ミネルヴァ書房、2020年、pp.70-78.
- （4） [https://www.oecd.org/education/2030-project/teaching-and-learning/learning/student-agency/OECD\\_STUDENT\\_AGENCY\\_FOR\\_2030\\_Concept\\_note\\_Japanese.pdf](https://www.oecd.org/education/2030-project/teaching-and-learning/learning/student-agency/OECD_STUDENT_AGENCY_FOR_2030_Concept_note_Japanese.pdf)（2022年8月29日取得）
- （5） 荻谷剛彦『追いついた近代 消えた近代 戦後日本の自己像と教育』岩波書店、2019年、pp.265-281.
- （6） 溝上慎一『社会に生きる個性 自己と他者・拡張的パーソナリティ・エージェンシー』東信堂、2020年、pp.99-110.

## 参考文献

- 雨宮沙織・柄本健太郎「OECD Future of Education and Skills 2030 プロジェクトにおけるコンピテンシーに関する議論の変遷－ OECD ラーニング・コンパス（学びの羅針盤）2030 に着目して－」『東京学芸大学紀要 総合教育科学系』第 72 集、東京学芸大学、2021 年 2 月、pp.579-588.
- 猪瀬武則「経済教育におけるエージェンシー育成の課題－どのような構成をすべきか？－」『経済教育』第 40 号、経済教育学会、2021 年 12 月、pp.92-96.
- 柄本健太郎・松尾直博「生徒と教師の Co-agency とは－共に学びを創ることの困難さ、必要な力と学校体制－」『東京学芸大学教育実践研究』第 16 集、東京学芸大学特別支援教育・教育臨床サポートセンター、2020 年 3 月、pp.179-187.
- 翁川千里・扇原貴志・柄本健太郎・松尾直博「中学生と高校生における生徒エージェンシーとコンピテンシーの関連」『東京学芸大学紀要 総合教育科学系』第 72 集、東京学芸大学、2021 年 2 月、pp.157-167.
- 扇原貴志・柄本健太郎・松尾直博・雨宮沙織「教師エージェンシーの想定要素の検討－その関連要因とコンピテンシー育成の手立ての頻度との関連－」『関係性の教育学』第 21 巻第 1 号、関係性の教育学会、2022 年 5 月、pp.33-52.
- 草津晃平・松本大輔「エージェンシー概念の整理と理論的考察－『責任』を学習する評価活動は学習活動－」『西九州大学子ども学部紀要』第 12 号、西九州大学子ども学部、2021 年 3 月、pp.32-40.
- 経済協力開発機構（OECD）編著、ベネッセ教育総合研究所企画・制作、無藤隆・秋田喜代美監訳、荒巻美佐子・都村聞人・木村治生・高岡純子・真田美恵子・持田聖子訳『社会情動的スキル 学びに向かう力』明石書店、2018 年
- アンドレアス・シュライヒャー著、経済協力開発機構（OECD）編、ベネッセコーポレーション企画・制作、鈴木寛・秋田喜代美監訳、小村俊平・平石年弘・桑原敏典・下郡啓夫・花井渉・藤原誠之・生咲美奈子・宮美和子訳『教育のワールドクラス 21 世紀の学校システムをつくる』明石書店、2019 年
- 白井俊（話し手）・諏訪哲郎・森朋子（聞き手・解説）「OECD ラーニング・コンパス 2030 について－文部科学省 白井教育制度改革室長に聞く－」『環境教育』第 31 巻第 3 号、日本環境教育学会、2021 年 12 月、pp.3-9.
- 田熊美保「Preliminary Findings from the OECD Education 2030 project OECD Education 2030 プロジェクトからの中間報告」『国立教育政策研究所紀要』第 146 集、国立教育政策研究所、2017 年 3 月、pp.95-107.
- 田熊美保・秋田喜代美「新しい学力像と評価のあり方」佐藤学・秋田喜代美・志水宏吉・小玉重夫・北村友人編『教育 変革への展望 5 学びとカリキュラム』岩波書店、2017 年、pp.273-309.

三浦浩喜「OECD 東北スクールの実践と若者たち」『日本教育政策学会年報』第23号、日本教育政策学会、2016年7月、pp.46-54.

溝上慎一『学習とパーソナリティ 「あの子はおとなしいけど成績はいいんですよ！」をどう見るか』東信堂、2018年

溝上慎一「講演『社会で求められる主体性（エージェンシー）と個性の育成—人ならではの相互作用を目指して—』」『関西学院大学高等教育研究』第12号、関西学院大学高等教育推進センター、2022年3月、pp.141-162.

柳本一休「協働探究カリキュラムにおける省察と評価についての考察—附属義務教育学校後期課程数学科の実践を事例として—」『福井大学教育実践研究』第45号、福井大学教育学部附属教育実践総合センター、2021年3月、pp.31-41.

（すけがわ あきひろ・教授）